

# 続・ 珈琲の思い出 25

鈴木優子

「ねえ、ところで、和樹さんはお酒はお強いんですか？」

「僕？僕はねえ？強いのかなあ？でも、好きですね。いつも会社の飲み会では『入沢係長！それぐらいでやめときましようよ！』って部下から止められています、ハハハ」

「へえ、和樹さんって係長さんなんですね！何だか萌えちゃいます、キャハハ！」

「な、なぜ萌えるんですか!?わからないなあ。」

「だって、和樹さん、いつも優しくそうなお顔をしているから、一体どんなお顔をしてお仕事をしているのかなあ？て思っって……」

「こんな顔ですよ！」と和樹が眉間に思いきり深い皺を寄せた厳しい顔をして見せたら、優子はケラケラと笑い転げた。

こんなに楽しいお酒はいつ以来だろう？和樹は優子と一緒にこうしていられることに心の底から感謝した。

コースの前菜に運ばれてきた新若芽の酢の物を口に入れると、優子は目を細めてつぶやいた。「美味しい……」

しかし、和樹は酢の物が苦手である。なかなか箸をつけることができずにグズグズしていると、優子がそれを目ざとく見つけて言った。

「和樹さん、ひよつとして、酢の物嫌いなんですか??」

「はい……実は酸っぱいのが苦手で……」

「もう、そんな……これ、とっても美味しいですよ。それに酢の物は体にいいんですから。ちゃんと食べて下さい。」

「えーっ!?そんなあ、それじゃ、優子さんが食べさせてくれたら、僕、ちゃんと食べますよ。なーんっって……」

「いいですよ、もう……仕方がないなあ。」(続く)